HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	味覚障害患者における臨床的特徴と治療成績に関する検討 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	山下, 映美
Citation	北海道大学. 博士(歯学) 甲第13496号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/74168
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Emi_Yamashita_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称　　博士（歯学）　　氏　名　山　下　映　美

審 査 担 当 者　主査　教授　北　川　善　政
　　副査　教授　舩　橋　誠
　　副査　教授　山　崎　裕

学　位　論　文　題　名
味覚障害患者における臨床的特徴と治療成績に関する検討

審査は，審査担当者全員の出席の下，はじめに申請者より提出論文の概要の説明が行われた。申請者より提出された論文の概要は以下の通りである。

高齢者が健康に生活してQOLを保つために豊かな食生活は不可欠であるが，味覚異常を訴える高齢者は増加傾向にあり，それにより食べる楽しみが失われ，健康状態にまで影響を及ぼす。北海道大学病院口腔内科に味覚異常を主訴に来院する患者も増加している。 今回，当科を受診した味覚障害患者の背景因子，原因，診断と治療効果を検証した。

2010年7月から2017年3月に味覚異常を主訴に当科を受診した患者271例を対象とし，自覚症状，原因，検査所見，治療法，治療効果について後方視的に検討した。治療効果判定はカルテ記載を参照し，治癒，改善，不変，悪化に分類した。

対象271名の性別は男性71例，女性200例で，年齢は19歳から94歳（平均65.5歳）であった。口腔乾燥を認めた症例は184例（68%），カンジダ陽性の症例は100例（37%）であった。ろ紙ディスク法は163例（60%）で，全口腔法は193例（71%）で実施されていた。

自覚症状は味覚減退116例（43%），自発性異常味覚91例（34%），異味症30例（11%），解離性16例（6%），味覚消失12例（4%），味覚過敏6例（2%）であった。主な原因は心因性97例（36%），口腔疾患58例（21%），特発性54例（20%），亜鉛欠乏性17例（6%）であった。自発性異常味覚では41例（45%）の原因が心因性で，他の症状と比較して心因性の割合が有意に高かった（$P < 0.05$; $\chi^2 = 4.5$）。 治療法は236例（87%）において薬物療法が行われ，236例中181例（77%）で改善を認めた。主な使用薬剤はロフラゼプ酸エチル110例（41%），漢方106例（39%），抗真菌薬87例（32%），ポラプレジンク79例（29%）であった。治癒改善率はロフラゼプ酸エチル77%，漢方56%，抗真菌薬62%，ポラプレジンク67%であった。原因別の治癒改善率は心因性97例中66例（68%），口腔疾患58例中47例（81%），特発性54例中44例（81%），亜鉛

欠乏性17例中16例（94%）であった。病悩期間6か月未満の症例の治癒改善率は80%，6か月以上の症例は71%であり，有意差は認めなかった（$P = 0.09$，$\chi^2 = 2.2$）。

本研究では味覚障害の原因として口腔疾患の割合が耳鼻咽喉科からの報告と比較して多かった。味覚異常に伴い口腔乾燥と舌痛を自覚した症例が多く，口腔外科・内科を選択し，その結果口腔疾患由来の症例の割合が多くなったと考える。

味覚障害と亜鉛欠乏との関連は多く報告されている。味覚障害への亜鉛補充による改善率は7割前後と報告されているが，本研究では67%だった。他の原因の症例も潜在的亜鉛欠乏の関与が考えられ，原則亜鉛補充療法を行うことは効果的と考える。また，本研究ではロフラゼプ酸エチルが多く用いられ，高い効果が確認された。ベンゾジアゼピン受容体とGABAの関与により「おいしさ」そのものを増強するが，ロフラゼプ酸エチルは半減期が長いという特徴で有効とされている。心因性や特発性が原因の患者に対してロフラゼプ酸エチルの使用は選択肢として有用と考える。

当科を受診した味覚障害患者の原因は心因性，口腔疾患，特発性が全体の77%を占めていた。治療法については多くの症例に対して薬物療法が行われ，従来述べられている亜鉛補充は症例を選択すればより高い効果が得られると考えられた。さらに亜鉛補充が奏効しない症例や心因性が強く疑われる症例についてはロフラゼプ酸エチルの高い治癒改善が確認された。以上より，治療法の選択については，より慎重な原因鑑別が重要であると考えられた。

審査担当者が提出論文の内容および関連した学問分野について口頭により試問する形式で行われた。以下にその項目を記す。

（1）ベンゾジアゼピン系抗不安薬の作用機序（過分極の定義）について
（2）潜在的亜鉛欠乏の定義について
（3）効果判定の基準について
（4）若年者と高齢者の味覚障害患者のそれぞれの特徴について

これらの質問に対して申請者から適切かつ明確な回答がなされた。試問を通じて，申請者が本研究について十分に理解していること，ならびに関連分野に関する幅広い知識を有していることが認められた。本研究によって得られた知見は今後の味覚障害患者の歯科医療に重要な示唆を与えると考えられ，学位論文に値する意義のある研究と評価された。

以上のことから，審査委員全員は申請者が博士（歯学）の学位を授与されるに相応しいと判定した。